



や

No. 26
2007.2.10

これは世につたえておきたい
かたっておきたい
わが胸の底から真実のおもい
人生幾山河のめぐりあい
あの日の風やひかり そして空のひとひら
哀歎のかがり火に生きた幾年月の路
「自分史図書館」は その証言館です。

黄櫨27号 創刊10周年記念特集

館長 椎窓 猛

記念号として、特別寄稿をお願いしたが、麻生福岡県知事はじめ20名の方々がエッセーに、詩をとどけていただいた。

「観桜」と題して、麻生知事は、京大柔道部時代の思い出深いエピソード、それに京都の桜風景について描かれたエッセー。読みながら達筆の知事さんだと感服する。

「コスモスの香りを
心にしみこませたやさしい笑顔を、
秋の風にのせて 遠いふるさとへ」と、心なごむ詩を、各務章先生。
一昨年の秋、急逝の詩人川崎洋さん、
追悼の意味をこめて遺作を掲載した。
父の郷里筑後への望郷詩である。

また詩人松永伍一さんは、奥様を失ってから夏の夏、軽井沢暮らしの近況報告。水上勉氏の著書『風部落』を松永さんは高校時代熱心に読んだ一冊であったというのだ。本一冊といえども、読み方次第で、先賢の教えを乞うことに匹敵することが示唆



○バルビゾンの道

高橋甲四郎

本の帯に『日本随筆協会賞』受賞、風景描写、自然描写に優れた「秋の気配」で、第54回「日本随筆家協会賞」に輝いた著者の随筆集と記されている。

受賞作のそのエッセーは、秋の朝、牛乳を買いにスーパーへ行くまでの途上、心地よい朝の空気を胸いっぱい吸いながら、おりから咲き乱れるコスモスの花の漂いを見、「桃季不言、下自成蹊」とか、「徳は孤ならず、必ず隣あり」と古諺

を思いうかべるなど、悠々清澄な小路を歩きながらの感懐の記である。

標題の「バルビゾンの道」は、この八女の地に居住の画伯坂本繁二郎先生が、この地の景観は、フランス閑静な農村バルビゾン

を想わせるとの言葉にちなみ、名づけられた通りである。著者もまたこの通りの風物を楽しみながらお暮らしである。

他に中学時代の思い出、恩師のこと、交友記など慈味あふれる回想記で編まれている。

「人生に強い影響を受ける年代は、子供から大人への萌芽、18才ぐらまでの年代ではなかろうか、この年代に受けた影響が人生を大きく左右すると述べられたくんだりなど、長い人生体験に裏打ちされた真実のひびきがこもっている。

(カバー絵は田代喜政生画伯)

される。

東京で臨床内科医として精励されながら、歌人でもある大坪公子先生からは「在宅酸素の人」。

この部屋で一人で死ぬと酸素吸ふ意識清明な男の決意

家族を探しても誰一人見えない。こうした境遇で死を迎える人もいるのだ。大坪先生は家族の人よりも医師として強い絆で結ばれたのではないかと述べられる。

ノンフィクション作家中村賢太郎さんから「故郷の空」土地考現学。

「異人として他者に接し、他者を

受容したときに愛が芽生えるように他郷に出て、異郷の空に接したとき私は筑後とみちのくの空を等しく愛することができるようになった」とと仙台暮らしの体験談。

時代小説作家として脚光をあびてきた安部龍太郎さんは、山里暮らしの我が母郷、剣持に生きつづける人々への温情あふれるメッセージ。

27号特別寄稿の方々に改めて感謝の意を表しながら、読みごたえのある貴重なエッセーを巻頭に掲げることが出来たことを編集長としてよるこんでいる。





あと、自らにふさわしい第二の人生をどう選ぶとるか、「もうひとつの人生」のスタートラインとしてどう受けとめるか——と課題を確認している。

目次を見ると——

1. 可能性ゆたか第二の人生～作家城山三郎氏は、清忙の大晩年へー思い切った転身で活躍の人物が紹介されている。第二どころか三、四、十まで送る人生でありたい。

趣味力の発見、定年帰農会社への「離墨感覚」を。豊かな時間をどう獲得するか。定年後の夫婦のあり方。ネクタイを外して、生き甲斐探し、還暦の大学生となって——

要はライフ・ステージにどう対応するか。答えは多彩多様。

○八女の方言歳時記
文 郷田 敏男
絵 梅本 光男

黒木町出身、現在福岡文化連盟事務局長の古賀透氏が『「しょうて」が蘇る八女弁の現場ドキュメント』と題したユニークな序文を寄せている。

それは流行作家五木寛之さんも、博多に戻ってくれば、「ようら～」と方言を発声したことから、言葉には、それにふさわしい環境場所が必要なこと、その地においてこそ初めて生き生きと躍動する方言。この一冊は、そのドキュメント集と解説されている。

石路日和托鉢僧の足疾く
幼な賀客あかき風船置き忘る
一つ灯に子と居る幸や秋時雨
背振嶺をはろかに蘭田の凍りけり
子の部屋に雀飛びこむ風五月
椿散る兄の口笛しのびをり
亡き母の櫛さしてみる初鏡

句集 芙蓉 広津しげこ

「芙蓉」の俳人、著者広津しげこさんは、筑后市山ノ井の人。俳誌「馬酔木」「さぼん」の同人。

序に、徳留末雄氏はこの句集を生活史そのものであると記し、人、暮らしを詠んだ句が多く、人柄がにじんできている、そこにはみな人影が見えることが好ましいと賞讃されている。

○定年後「もうひとつの人生」への案内

どなたが「自分史図書館」へご寄贈なさったのであろうか。岩波書店編集部編の大冊である。

この春は、団塊の世代、大量退職、定年その後の生き方が話題となっているだけに、時季にふさわしい人生参考、手引き書だといえそうな一冊である。

まえがきに、会社人間としての拘束やら特権から離脱し、生活のリズムも日々の目標も否応なく激変した

私の稀観本ノート その26
— 併せて 編集掌記 —

▼新春一月七日の日曜日から毎週日曜日ごとに久留米市“えーるピア”において、文学講座の講師を依頼された。テーマは「こころ新たに昭和文学を読み返す」とし、昭和戦前戦後、とくに女性作家を中心に——という希望も

▼「キラメル工場から」の主人公は、佐多稲子自身の体験によるものと想像されるが、小学五年生中退での女工生活、ここに描かれている哀感を汲みとらずには——と思ふのだが、そこには感情は働かず……概

受け話をすゝめている。▼戦前の作品では、林芙美子の「放浪記」「風琴と魚の町」佐多稲子の「キラメル工場から」をとりあげて鑑賞した。七十名余の聴講生はみな熱心な態度だが、なかにヒネクレおっさんもいて、林芙美子の放浪の旅さき、その足跡はいつ、どこどこか——佐多稲子はプロレタリア文学か、などとそのジャンル、色わけについての質問には往生した。文学鑑賞の要諦は、人生、人間の真実な生き方を如何に読みとるか、どこに感動したか、読者は作品を読むことによつていかに精神が浄化されたか——に在る、と、強調したが、

受けて話をすゝめている。▼戦前の作品では、林芙美子の「放浪記」「風琴と魚の町」佐多稲子の「キラメル工場から」をとりあげて鑑賞した。七十名余の聴講生はみな熱心な態度だが、なかにヒネクレおっさんもいて、林芙美子の放浪の旅さき、その足跡はいつ、どこどこか——佐多稲子はプロレタリア文学か、などとそのジャンル、色わけについての質問には往生した。文学鑑賞の要諦は、人生、人間の真実な生き方を如何に読みとるか、どこに感動したか、読者は作品を読むことによつていかに精神が浄化されたか——に在る、と、強調したが、

蔵書目録④ができます ¥100 円 80 (郵便切手可)

自分史図書館

入館無料
開館 午前9時～午後5時
閲覧希望の方は予め電話でご確認下さい。
貸し出しはしていません。

〒833-0032 筑后市野町423-8
TEL・FAX 0942-53-8122
西鉄バス野町停留所より徒歩5分
インターネットでもご覧になれます。http://www.jibunshitsosyokan

受贈図書紹介は今月休みます。

念規定のみにとらわれる奇妙な学究タイプ。そこへいけば、女性の方が精神がやわらかく、勉強家である。▼戦後では、昨今、早や忘れられそうな作家有吉佐和子の作品「恍惚の人」「複合汚染」「紀ノ川」など読み返す糸口を語りたい。「私は忘れられない」などは昭和三十四年、朝日新聞に連載の新聞小説。日本にはこんな島の暮らしもあるのか、鹿児島から連絡船で八時間、南の離島黒島、小学校教師と子どもらの生活を描いたもの。「文明にだれきつている都会の人間にとつて、辺地を忘れずにいることは、ある意味で覚醒剤です」と、作者はあとがきに記している。有吉佐和子は昭和五十九年八月、急性心不全で死去、五十三歳。▼この講義で、人生史サークル会誌『黄檗』『世界子ども愛樹祭コンクール作品集』をプレゼントしたが、久留米市民の反応は——。(自分史図書館長)